

原著

火傷菌ノ學名

第四高等學校教授 市村 塘

本誌第六二號(明治四四、一、二八)ニ「紅肢痛ニ就テ」楠田利一郎氏ノ論文アリ、之ニ記載セル患者澤野井勇助(石川島郡瀧尾村字井田、農、三三歲)ノ病症(明治四十三年十月十三日)

激烈ナル刺痛發作十數回來リ殆ンド安眠スルコト能ハズ全身ノ振顫アリ發作時ノ惡寒ヲ以テ來リ殊ニ四肢ノ振顫甚シク三十分乃至三時間モ持續シ苦悶甚シク殆ンド堪ヘ難ク呻吟ス然シ冷水中ニ患部ヲ浸セバ多少輕快ス爲ニ

晝夜冷水ノ交換ヲ數十回行ヒ辛フシテ稍々其苦ヲ減ズ其他ニハ全身ニ異狀ナク食慾体温便通ハ平日ニ異ナラズ云々。

ガ火傷菌中毒症ニ一致スルニ拘ハラズ氏ハ本病ノ原因ヲ

未明瞭寒冷作用、神經病ノ素因、遺傳等ト推舉スル人(Diobenne)アレドモ本病ハ獨立ノ疾病ニアラズ中樞神經系ノ器質的或ハ官能的疾病又ハ末梢神經ノ疾病ニ基因スル一種ノ複雜症狀ナラント云フ人(Lewin Benda)モ

アリ現今ハ Angioneurose ノ一種ト見做サル、而シテ痲痺質斯、梅毒、淋疾、神經衰弱、動脈硬變、寒冷、日射、濕潤、過勞、外傷等ハ實ニ本病ノ誘發原因タルベシ云々。

ト結論セラレタリ、對照上余ハ醫學博士松原三郎氏ノ厚意ニヨリ得タル、金澤病院ニ於ケル火傷菌中毒症狀記錄ノ一ヲ左ニ掲グベシ。

石川縣鹿島郡劍地村字馬場

宮本甚左衛門

三十六才

本年(大正三)十月二十一日ヨリ三日間一種ノ茸(火傷菌)ヲ食シタルニ其後三日ニシテ兩足尖ニ灼熱感、知覺異常(長時間坐位ニ居ル時ニ覺ユル様ナル知覺異常)疼痛ヲ漸次ニ發生スルニ至リタリ、而シテ患部ヲ擧上スルカ又ハ水中ニ浸ス時ハ疼痛並ニ知覺異常ハ全ク消失セリ、而シテ疼痛ハ發作性ニアラズシテ持續シ只水中ニ入ル、時ハ消失スルヲ常トセリ而シテ水中ヨリ出ス時ハ僅カニ十分間程ニシテ疼痛再發シ再ビ水中ニ入ル、ノ止ムヲ得ザル様ニナリ、水中ニ置ク時間ハ漸次ニ延引スルニ至リ夜間ハ疼痛増惡シテ不眠トナリ此ノ如クニシテ發病一週間後ニ至リテハ兩足ヲ水中ヨリ脱

楠田氏ハ同地ノ村田醫師ノ好意ニヨリ實驗スルコトヲ得タリト云ヘルニヨリ、余ハ村田氏ニ書ヲ致シ若シヤ火傷菌ノ中毒ニアラズヤト問ヒ合セタルニ、左ノ返信ヲ得タリ、蓋シ此菌發生ノ季節ニ於テハ<sup>ヤブシメデ</sup>藪濕地ト稱シテ常食トシ決シテ怪マズ、多食セザレバ中毒症著現セザルガ故ニ患者自身モ菌中毒トハ自覺セザルトコロカラ、特ニ菌食ヲ醫師ニ訴ヘザリシニハアラザルカ。(毒成分ハ水ニ溶解スルモノ、如シ故ニ豫メ浸水シタルモノト新鮮ナルモノトハ中毒程度ニ相違アルベシ)

拜啓貴書拜見仕候陳者當地澤ノ井勇助居宅ニ付相尋ネ候處癩病當時ハ藪濕地盛ニ發生食用ニ供セシ由ニ候……………貴説ノ如ク紅肢痛ノ原因ハ菌ノ中毒ニ基因致スモノト相信シ候思フニ當時彼等ハ好下物トシテ多食シタル

モノニ相違無之今ヨリ想像スル時ハ茲ニ氣付カザリシハ惜ムベキ次第ニ御座候而シテ毎年期月ヲ同フシテ發病シタルニ鑑ミ菌茸ノ中毒タル最早疑フ餘地ナシト信シ候右及御回答候云々。

余ハ更ニ瀧尾村字井田產<sup>ヤブシメデ</sup>ノ藪濕地ト、劍地村字馬場產ノモノト果シテ同一種ナルヤヲ確カメント思ヒ、特ニ村田氏ニ依頼シ菌茸ノ送致ヲ乞ヒタルニ、同氏ノ七尾分院出張先ヨリ一回廻送セラレシモノハ、愛憎全ク無關係ノ菌茸ナルニ失望シタレドモ、尙ホ念ノ爲、同村駐在巡查米澤時次郎氏ニ余ノ着色圖ヲ示シテ聞キ合セ貰ヒタルニ、菌ノ形色一致スル旨ノ通知ヲ受ケタリ。

スル事能ハザルニ至ル、手端ノ疼痛ハ足ヨリ二三日遅レテ來レリ依テ寛ヲ以テ川ヨリ水ヲ導キ、座席ノ床板ヲ除去シテ箱ヲ造リ之ニ水ヲ流滯シ七、八時間絶エズ水中ニ浸シタリ、當時足ノ皮膚ハ白色ニ變シテ浸軟シ腫起シテ水垢様ノモノガ毛ノ如クニ足ニ附着シ、自發痛ハ消失シ從來全ク無カリシ冷寒ヲ覺ユル様ニナレリ、依リテ水中ヨリ足ヲ出シテ三日ヲ經過セルニ水中ニ浸セシ部ト浸サレザル部トノ境界線ニ於テ化膿狀ヲ呈シタリ依リテ醫士ニ診ヲ乞ヒ軟膏ヲ貼付セリ、而シテ其後黑變セシ部ノ皮膚ハ剝脱ヲ始メ之ヨリ疼痛ヲ再發シ皮膚ハ足關節部迄剝脱セシニ之ヨリ尖端部ハ冷却セリ、之ヨリ先キ皮膚ノ剝脱セザリシ時ハ足背ノ略ハ半部迄ハ溫カナリシガ皮膚ノ剝脱後ハ全ク冷却スルニ至レリ。

是ヲ在來文獻ニ徴スルニ、醫學士磯森氏ノ「菌中毒患者一奇症」、並ニ醫學博士猪子吉人氏ノ「菌中毒患者ノ一奇症」  
(共ニ東京醫學會雜誌第五卷第四號) 中ニ記載セラレタル患者(下平博士ヨリ借覽)

京都府山城國宇治郡山科村 一家族四人 (明治二十年十月)  
福島縣磐城國平町 一家族四人 (明治二十三年十月)

同 縣岩代國信夫郡平野村 一家族五人 (明治二十三年十月)  
同 縣若松町 一家族五人 (明治二十三年十月)

ノ病症ヲ通讀スルニ馬場ノ患者ト全然符節ヲ合スルガ如シ、菌ノ名稱ガ各地、たけもたし、さゝたけ、やぶたけ、やぶもたし、さゝもたしノ範圍ヲ脱セザルノミナラズ猪子氏ノさゝたけ(乾燥品)記載ヲ見ルニ

蓋ハ直徑凡ソ二乃至四仙迷ニシテ中央陷凹ス鱗片等ナシ裏面ニ繖アリ莖ニ垂生スルガ如シ、繖ノ一小片ヲ〇・五%ノ食鹽水ニ浸シ軟化シ針尖ヲ以テ破碎シ以テ顯微鏡下ニ照セバ白色ノ子實ヲ見ル、莖ハ長サ一・五乃至四

仙迷、蓋ハ中央ニ附着シ内ニ空洞アリ鏢ナシ、由是觀之「さゝたけ」ハ繖科菌即チ「アガリクス」屬ノ一種ナルコト明瞭ナレ其亞屬ヲ詳ニセズ。

余ノ實地採集シタル馬場產火傷菌ニ一致スルヲ認ムルナリ、理學博士川村清一氏ノ「奇ナル中毒症ヲ發スル毒菌カ  
らはつたけニ就テ」(植物學雜誌第二十卷第二七五號) 中ニ見ルトコロノ中毒症記載ハ磯氏、猪子氏ノ寫シト見テ差支ナキモ當ノ中毒菌ハ全然別物ナリ、是恐ク博士ガ長野縣產ノからはつたけヲ若松町ノ北會津郡役所ニ送致シテ要求セラレタル往時中毒患者ノ生存者天井某ノ鑑定ニ信ヲ置キ過ギラレタル結果ナラント余ハ思フ、又最近醫學博士岩川克輝氏ノ内報ニヨレバ新潟縣下ニ同様ノ中毒患者發生シ、菌モ馬場產ノモノト同種トノコトナリ聊カ大膽ノ嫌ヒナキニアラザルモ余ハ從來知ラレオル日本各地ノ火傷の奇病ハ皆同一菌(火傷菌)中毒ノ爲メナルコトヲ斷言セントス。

紅肢症狀ニ就キテハ尙ホ疑問ノ餘地アルニツキ松原博士ト協議ノ上火傷菌ニ *Clitocybe acromelalga* ト命名シ左ノ記載ヲ附シテ米國シカゴ大學發兌ノ Botanical Gazette ニ發表スルコトトナセリ、因テ本誌ノ餘白ヲ借り諸賢ノ高教ヲ待ツ、終ニ臨ミ本菌採集ニ多大ノ便宜ヲ與ヘラレタル吉見石川縣技師ヲ始メ有益ナル助言者村田醫師、野田校長、川村博士、岩川博士、松原博士諸氏ニ深厚ナル謝意ヲ表ス。(植物學上ノ文獻ハ一切茲ニ除之)(了)

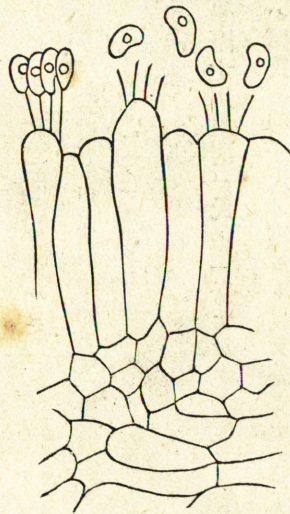


茸高サ二一六「センチメートル」、蓋五一一〇「センチメートル」表面平滑、中央凹入、新鮮ノモノ橙黃色、乾燥スレバ暗赤褐色トナル、肉、白色、乳汁ナシ、襖薄クシテ密、白色、莖ニ稍ヤ垂下、脆カラズ、擔子柄四芽胞ヲ負荷ス、芽胞、白色平滑、卵圓、長徑三一四「ミクロン」、短徑一五一二五「ミクロン」、莖長サ二一五「センチメートル」、徑、〇・五一一「センチメートル」、固性、纖維質、空洞、蓋ト同色、發生地 藪地 時期 十月—十一月。



× 1/1

火 傷 菌



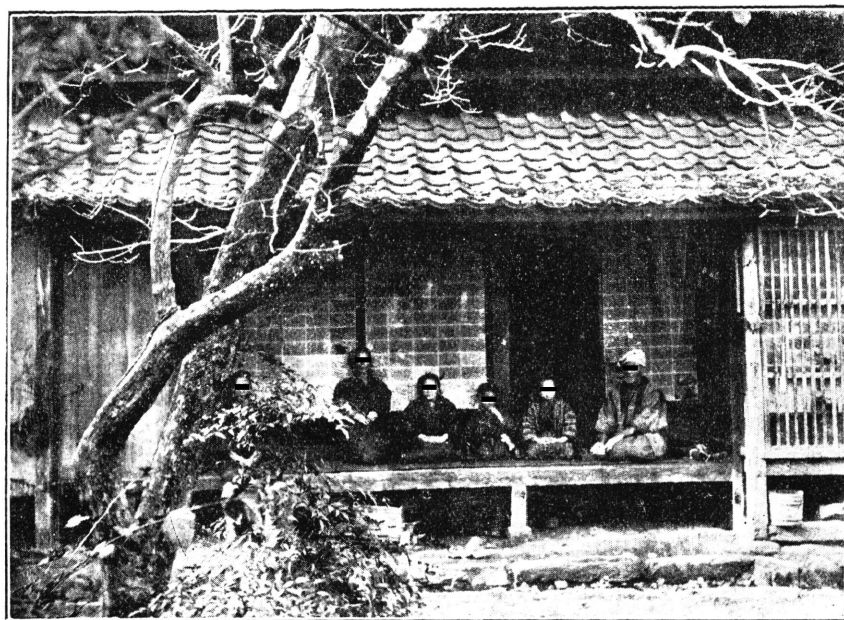
× 1500

火傷菌 擔子柄上ノ芽胞





火傷菌 ( $\times \frac{2}{3}$ )



火傷菌中毒患者發生ノ宅。甚右衛門(五八歳)，同妻あい(五八歳)  
長男甚左衛門妻きよ(三歳)，孫千代(十二歳)及耕秋(八歳)



甚右衛門宅後庭竹林ニ於テ火傷菌發生ノ光景